

# Oracle® Enterprise Manager

System Monitoring Plug-in インストール・ガイド for IBM DB2 Database

リリース 8 (3.3.1.0.0) およびリリース 9 (3.4.1.0.0)

部品番号 : B53230-02

2009 年 4 月

---

このドキュメントでは、まず Oracle System Monitoring Plug-in for IBM DB2 Database の概要を説明し、次に、このプラグインでサポートされるバージョンの詳細、およびインストールの前提条件を示します。さらに、プラグインをダウンロード、インストール、検査および検証するための手順を説明します。

## 1 説明

System Monitoring Plug-in for IBM DB2 Database は、Oracle Enterprise Manager Grid Control を拡張して、IBM DB2 UDB (LUW) データベース・インスタンスを管理できるようにするためのプラグインです。このプラグインを Grid Control 環境にデプロイすることで、次の管理機能を使用できるようになります。

- DB2 Database インスタンスの監視。
- DB2 データベース・インスタンスの構成データの収集および構成の変更の追跡。
- 監視ターゲットおよび構成データに設定されたしきい値に基づくアラートおよび違反の表示。
- 収集データに基づいた豊富なレポートの提供。
- リモート・エージェントによる監視のサポート。ローカル・エージェントは、DB2 データベースと同じホストで稼働するエージェントです。リモート・エージェントは、DB2 データベースが稼働するホストとは異なるホストで稼働するエージェントです。

## 2 サポートされるプラットフォーム

プラグインでは、IBM DB2 UDB のインストールが可能なすべてのプラットフォームで IBM DB2 UDB (LUW) の監視をサポートします。

## 3 サポートされるバージョン

このプラグインでは、次のバージョンの製品がサポートされます。

- Enterprise Manager Grid Control 10.2.0.1 以上 (Oracle Management Service および Oracle Management Agent)
- IBM DB2 Universal Database (UDB) for Linux, UNIX, and Windows (LUW) バージョン 8.2 FixPak 2 以上 (8.2.x、9.x.x)

**ORACLE®**

Copyright © 2009, Oracle. All rights reserved.

Oracle と Oracle のロゴは Oracle Corporation の登録商標です。Oracle Enterprise Manager は、Oracle Corporation の商標です。記載されているその他の製品名および社名はその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれ該当する所有者の商標です。

## 4 前提条件

プラグインを使用する前に、次の前提条件を満たす必要があります。

- 次のソフトウェアをインストールします。
  - Enterprise Manager Grid Control 10.2.0.1 以上
  - IBM DB2 Universal JDBC Type 4 ドライバ for IBM DB2 Database (3 ページの「[JDBC ドライバの設定](#)」を参照)
  - IBM DB2 Universal Database
- プラグインをデプロイするすべてのエージェントで優先資格証明を設定し、検証します。詳細は、「[プラグインをデプロイする管理エージェントの構成](#)」を参照してください。
- IBM DB2 で使用されるテーブル・ファンクションにアクセスするための適切なオペレーティング・システム・ユーザーを作成します。ユーザー作成の詳細は、「[適切なオペレーティング・システム・ユーザーの使用と認可レベルおよび権限の割当て](#)」を参照してください。
- (Microsoft Windows で稼働するエージェントの場合) ユーザーの OS 権限 (エージェントの優先資格証明で設定) が、次のいずれかのインストール・ガイドのジョブ・システムを Enterprise Manager で機能させるための資格証明の設定に関する項に記載されている要件を満たしている必要があります。
  - 『Oracle Database インストール・ガイド for Microsoft Windows (32-bit)』
  - 『Oracle Database インストール・ガイド for Microsoft Windows (64-bit) on Intel Itanium』
  - 『Oracle Database インストール・ガイド for Microsoft Windows (x64)』

これらのガイドは、次の場所の Oracle Database ドキュメント・ライブラリのインストール・ガイドのセクションにあります。

<http://www.oracle.com/pls/db102/homepage>

---

---

**注意：** ユーザーに適切な権限を割り当てないと、デプロイに失敗します。

---

---

- データベースの監視メトリックのメトリック収集エラーを回避するために、表 STMG\_DBSIZE\_INFO を作成します。詳細は、「[データベースの監視 \(Database Monitoring\) メトリックのメトリック・コレクション・エラーを回避するために必要な構成](#)」を参照してください。
- IBM DB2 の診断ログ・ファイル (db2diag.log) を使用してアラートを生成する場合は、次のようにします。
  - \$ORACLE\_HOME/sysman/admin/scripts/emx/ibm\_db2\_database/ にある Diag\_log\_file\_match\_pattern\_file.txt ファイルに一致パターンを定義します。
  - \$ORACLE\_HOME/sysman/admin/scripts/emx/ibm\_db2\_database/ にある Diag\_log\_file\_no\_match\_pattern\_file.txt ファイルに無視パターンを定義します。
  - 監視する IBM DB2 データベースに対応するデータベース・マネージャ (インスタンス) の DIAG\_PATH 構成パラメータを設定します。

2つのファイルに定義したパターンに基づいて、IBM DB2 の System Monitoring Plug-in は診断ログ・ファイルを解析し、条件を満たす場合にアラートを生成します。まず、プラグインは、パターンが定義されているかどうかを確認するため、2つのファイルを検証します。パターンが定義されていないと、プラグインは診断ログ・ファイルを解析しません。一致パターンが定義されていないが無視パターンは定義されている場合、プラグインは診断ログ・ファイルのすべてのエントリを解析して、無視パターンと合致するかどうかをチェックします。一致パターンも定義されている場合は、プラグインは、まず一致パターンに合致するエントリのみ解析し、次に合致したエントリに対して、無視パターンが合致するかどうかをチェックします。

また、収集内に同じファンクション名の複数のログ・エントリがある場合、ファンクション名を示すアラートが1つのみ生成されます。このアラートは、診断ログ・ファイルにある共通ファンクション名を含む最後のログ・エントリに基づきます。

---

**注意：** この機能はローカル監視についてのみサポートされています。ローカル監視では、IBM DB2 データベースと同じホストで稼働する Oracle Management Agent によって DB2 データベースが監視されます。

---

- IBM DB2 Database の SQL 文のパフォーマンス、IBM DB2 Database のアプリケーション・ロック・パフォーマンスのレポート、およびエージェント監視メトリックで、アプリケーション名と SQL 文のテキストを表示するには、インスタンス構成パラメータ DFT\_MON\_STMT を有効にします。そうしないと、列にデータが表示されません。
- JDBC URL の一部として、IP アドレスもホスト名も使用できます。ホスト名がネットワークで一貫して解決されることを確認します。nslookup や traceroute などの標準 TCP ツールを使用してホスト名を検証できます。プラグインをデプロイする管理エージェントで次のコマンドを使用して検証します。
  - nslookup <hostname>  
IP アドレスと完全修飾ホスト名が返されます。
  - nslookup <IP>  
IP アドレスと完全修飾ホスト名が返されます。

## 5 JDBC ドライバの設定

JDBC ドライバは IBM から入手可能です。JDBC ドライバは次のファイルで構成されており、エージェントからこれらのファイルへのアクセスを可能にする必要があります。

- db2jcc.jar
- db2jcc\_javax.jar
- db2jcc\_license\_cu.jar

IBM DB2 Universal Type 4 JDBC ドライバを設定するには、次の操作を実行します。

1. \$ORACLE\_HOME/sysman に jdbcdriver ディレクトリを作成し、前述の .jar ファイルをそのディレクトリに置きます。
2. 個々のドライバ .jar ファイルの場所を、\$ORACLE\_HOME/sysman/config ディレクトリの classpath.lst ファイルに追加します。
3. OS クラスタを構成するシステムにエージェントがインストールされている場合、\$ORACLE\_HOME/<node\_name>/sysman/config ディレクトリ (node\_name はエージェントがインストールされているシステムの名前) の classpath.lst ファイルを編集する必要があります。

classpath.lst ファイルがない場合は作成します。たとえば、UNIX 環境の classpath.lst ファイルは次に示す例のようになります。

```
/home/usera/agent/sysman/jdbcdriver/ibm/db2jcc.jar
```

```
/home/usera/agent/sysman/jdbcdriver/ibm/db2jcc_javax.jar
```

```
/home/usera/agent/sysman/jdbcdriver/ibm/db2jcc_license_cu.jar
```

## 6 プラグインをデプロイする管理エージェントの構成

エージェントを構成するには、まず、エージェント・サービスを起動するユーザーがローカル管理者グループに属していることを確認します。また、プラグインをデプロイするすべてのエージェントで優先資格証明を設定する必要があります。これを行うには、次の項の手順に従います。

### 6.1 ユーザーへの高度な権限の割当て

高度な権限を割り当てるには、次のようにします。

1. エージェントをホストするローカルの Microsoft Windows ノードで、エージェント・サービスを起動するユーザーがローカル管理者グループに属していることを確認します。そうでない場合は、追加します。
2. Windows の「ローカルセキュリティの設定」ツールを開き、エージェント・サービスを起動するユーザーに次の高度な権限を付与します。
  - オペレーティング システムの一部として機能
  - プロセスのメモリ クォータの増加
  - バッチ ジョブとしてログオン
  - プロセス レベル トークンの置き換え
3. エージェント・サービスが稼働している場合は、再起動します。
4. Grid Control でホストとエージェントに対する優先資格証明を設定します。詳細は、5 ページの「[優先資格証明の設定と検証](#)」を参照してください。
  - 優先資格証明で設定する OS ユーザーは、ローカル管理者グループに属している必要があります。
  - この OS ユーザーは、次の高度な権限を持っている必要があります。
    - オペレーティング システムの一部として機能
    - プロセスのメモリ クォータの増加
    - バッチ ジョブとしてログオン
    - プロセス レベル トークンの置き換え

## 6.2 優先資格証明の設定と検証

プラグインをデプロイするすべてのエージェントで優先資格証明を設定するには、次のようにします。

1. Enterprise Manager Grid Control で、「プリファレンス」をクリックします。
2. 「プリファレンス」ページの左側のペインで「優先資格証明」をクリックします。  
「優先資格証明」ページが表示されます。
3. ホスト・ターゲット・タイプの対応するターゲット・タイプについて、「資格証明の設定」列からアイコンをクリックします。
4. ホスト優先資格証明ページの「ターゲットの資格証明」セクションで、プラグインをデプロイする管理エージェントが稼働しているホストのユーザー名とパスワードを指定します。
5. 資格証明の設定後、同じページで「テスト」をクリックします。テストが正常に実行されたら、資格証明は適切に設定されています。
6. プラグインをデプロイする管理エージェントに対して OS コマンド・ジョブを実行します。
  - Enterprise Manager Grid Control にログインします。
  - 「ジョブ」タブをクリックします。
  - 「ジョブ・アクティビティ」ページで「ジョブの作成」リストから「OS コマンド」を選択し、「実行」をクリックします。
  - 次のページで必要な詳細を入力し、「発行」をクリックしてジョブを実行します。ジョブが正常に実行されたら、資格証明は適切に設定されています。

## 7 適切なオペレーティング・システム・ユーザーの使用と認可レベルおよび権限の割当て

System Monitoring Plug-In for IBM DB2 は、IBM DB2 で使用されるテーブル・ファンクションにアクセスします。同プラグインがこれらのテーブル・ファンクションにアクセスするには、特定のユーザー・グループに割り当てられた、適切なオペレーティング・システム・ユーザーを使用する必要があります。このオペレーティング・システム・ユーザーには、少なくとも最小の権限を割り当てる必要があります。また、正しい認可レベルも割り当てる必要があります。

---

**注意：** IBM DB2 ユーザーはオペレーティング・システム・ユーザーである必要があります。IBM DB2 では、セキュリティをホスト・オペレーティング・システムに依存しているため、固有のデータベース・ユーザーを使用できません。

---

オペレーティング・システム・ユーザーをまだ作成していない場合は、IBM DB2 を実行しているホスト上にユーザーを1つ作成します。その後、次の手順に従って、そのユーザーを新規または既存のユーザー・グループに割り当てます。

1. IBM DB2 コントロール・センターを開きます。
2. ツリー表示から、接続するデータベースまたはデータベース別名を選択します。
3. 管理ユーザーとして接続します。
4. ツリー表示から、「User and Group Objects」を選択します。
5. 右側のペインから、すでに作成されているオペレーティング・システム・ユーザーを選択します。

6. 「Authorities」パネルから、「Connect to Database」を選択します。
7. 適用された変更を確認するために、データベースへの接続を試行します。

---

---

**注意：** これらの手順は、IBM DB2 SQL を使用してコマンドラインから実行することもできます。

---

---

さらに、オペレーティング・システム・ユーザー・グループに認可レベルと権限を割り当てます。IBM DB2 でサポートされる認可レベルは、SYSADM、SYSCTRL、SYSMAINT、DBADM および LOAD です。SYSADM、SSYSCTRL および SYSMAINT 認可レベルは、GRANT SQL 文を使用して付与することはできません。これらの特別な認可レベルは、データベース・マネージャの構成ファイルからのみ設定できます。DBADM 権限は、SYSADM 認可レベルのユーザーのみが付与できます。

SYSMON 認可レベルは、IBM DB2 を管理するために必要です。このレベルは、IBM DB2 で使用されるテーブル・ファンクション (SYSPROC.SNAPSHOT\_DATABASE など) にアクセスするために必要となります。

次の手順に従って、使用するユーザー・グループに SYSMON 認可レベルを設定します。

1. db2=> プロンプトで、次のコマンドを実行します。

```
db2=> update dbm cfg using sysmon_group USERGROUP
db2 => db2stop
db2 => db2start
```

2. 変更が反映されたかどうかを確認するために、次のコマンドを実行します。

```
db2 => get dbm cfg
```

このコマンドの出力は次のようになります。

```
Database Manager Configuration
Node type = Enterprise Server Edition with local and remote clients
.....
SYSADM group name      (SYSADM_GROUP)      =
SYSCTRL group name     (SYSCTRL_GROUP)     =
SYSMAINT group name    (SYSMAINT_GROUP)    =
SYSMON group name      (SYSMON_GROUP)      = USERGROUP
.....
```

---

---

**注意：** 認可レベルと権限が IBM DB2 でどのように実装されるかについては、IBM の Web サイトを参照してください。

---

---

## 8 プラグインのデプロイ

前提条件を満たしていることを確認した後、次の手順に従ってプラグインをデプロイします。

1. IBM DB2 Database プラグインのアーカイブを、ブラウザを起動しているデスクトップまたはコンピュータにダウンロードします。アーカイブは、Oracle Technology Network (OTN) からダウンロードできます。
2. スーパー管理者として Enterprise Manager Grid Control にログインします。
3. Grid Control ホームページの右上隅にある「設定」リンクをクリックし、次に「設定」ページの左側にある「管理プラグイン」リンクをクリックします。
4. 「インポート」をクリックします。
5. 「参照」をクリックしてプラグインのアーカイブを選択します。
6. 「リスト・アーカイブ」をクリックします。
7. プラグインを選択して「OK」をクリックします。
8. プラグインのデプロイ先のエージェントすべてに優先資格証明を設定したことを確認します。
9. 「管理プラグイン」ページで、DB2 Database プラグインの「デプロイ」列のアイコンをクリックします。管理プラグインのデプロイ・ウィザードが表示されます。
10. 「エージェントの追加」をクリックして、プラグインのデプロイ先のエージェントを1つ以上選択します。ウィザードが再び表示され、選択したエージェントが表示されます。
11. 「次へ」をクリックし、「終了」をクリックします。

優先資格証明が設定されていないというエラー・メッセージが表示された場合、「プリファレンス」ページに移動してエージェント・ターゲット・タイプの優先資格証明を追加します。

エラーがなければ、次の画面が表示されます。

図 1 デプロイ成功時の画面

The screenshot shows the Oracle Enterprise Manager 10g Grid Control interface. The main content area displays an information message: "Deploy operation completed. The status of the deployment can be found in the Deployment Status page in the Related Link at the bottom of this page." Below this is the "Management Plug-ins" section, which includes a description and a table of installed plug-ins. The table has columns for Name, Version, Deployed Agents, Description, Deployment Requirements, and Deploy/Undeploy actions. The installed plug-ins are:

Select	Name	Version	Deployed Agents	Description	Deployment Requirements	Deploy	Undeploy
<input type="checkbox"/>	ibm_db2_database	3.1.1.0.0	1	IBM DB2 Database monitoring including reports	Requires network access and proper credentials to IBM DB2 ...		
<input type="checkbox"/>	juniper_netscreen_firewall	2.0.1.0.0	2	Juniper Netscreen Firewall monitoring including reports	Requires network access to firewall device. Refer to ...		
<input type="checkbox"/>	microsoft_iis	2.1.2.1.0	1	Management Plugin to define a 'Microsoft IIS 6.0' target ...	Requires network access and credentials of the host where ...		
<input type="checkbox"/>	microsoft_sqlserver_database	3.1.3.1.0	1	Microsoft SQL Server monitoring (including reports)	Requires network access and proper credentials to Microsoft ...		

## 9 IBM DB2 でのヘルス・インジケータ (Health Indicator) メトリックとデータベースの監視 (Database Monitoring) メトリックの構成

この項では、IBM DB2 で実行する必要がある、インストール後の構成手順について説明します。

### 9.1 ヘルス・インジケータ (Health Indicator) メトリックに必要な構成

インスタンスおよびデータベース・オブジェクトのヘルス・インジケータは、データベース・マネージャの構成パラメータ HEALTH\_MON を使用して有効または無効にできません。これにより、テーブル・ファンクション HEALTH\_TBS\_HI、HEALTH\_DB\_HI および HEALTH\_DBM\_HI に値が移入されます。これらのファンクションは、ヘルス・インジケータのしきい値に基づいてトリガーされたアラートを表示するために、プラグインによって使用されます。

**注意：** これらの設定を有効にすると、一部のリソース (CPU やメモリーなど) にオーバーヘッドが生じることがあります。したがって、これらの手順はヘルス・インジケータ (Health Indicator) メトリックを表示する必要がある場合にのみ実行してください。

HEALTH\_MON を CLP (Command Line Processor) によって有効または無効にするには、次のコマンドを実行します。

```
db2==> update dbm cfg using HEALTH_MON [on;off]
```

変更が反映されたかどうかを確認するために、次のコマンドを実行します。

```
db2==> get dbm cfg
```

出力は次のようになります。

```
.....  
.....  
.....  
Monitor health of instance and databases (HEALTH_MON) = ON  
.....  
.....  
.....
```

詳細は、IBM の Web サイトを参照してください。

## 9.2 データベースの監視 (Database Monitoring) メトリックのメトリック・コレクション・エラーを回避するために必要な構成

データベースの監視 (Database Monitoring) メトリックのメトリック・コレクション・エラーを回避するには、GET\_DBSIZE\_INFO パッケージを呼び出して、STMG\_DBSIZE\_INFO 表を作成し、必要なデータを移入する必要があります。

GET\_DBSIZE\_INFO プロシージャは、データベースのサイズと最大容量を計算します。算出された値は、プロシージャの出力パラメータとして返され、SYSTOOLS.STMG\_DBSIZE\_INFO 表内にキャッシュされます。これらの値がキャッシュされるのは、計算のパフォーマンス・コストが高いためです。

SYSTOOLS.STMG\_DBSIZE\_INFO 表は、このプロシージャの初回実行時に自動的に作成されます。SYSTOOLS.STMG\_DBSIZE\_INFO 表にキャッシュされた値は、snapshot-timestamp と refresh-window の各値に基づき、古い値でないことを確認されたうえで返されます。

キャッシュされた値が最新でない場合は、新たに算出された値がキャッシュされ、SYSTOOLS.STMG\_DBSIZE\_INFO 表に挿入されて返された後、snapshot-timestamp 値が更新されます。GET\_DBSIZE\_INFO で最後に取得されるパラメータは refresh-window です。

refresh-window (コール間の時間間隔) のデフォルト値は 30 分です。データベースの更新がより頻繁に行われる場合は、より短い時間に設定することもできます。

GET\_DBSIZE\_INFO の呼出しを CLP (Command Line Processor) によって行う場合は、次のコマンドを実行します。

```
db2==>CALL GET_DBSIZE_INFO(?, ?, ?, -1)
```

この例の場合、refresh-window は 30 分になります。

詳細は、IBM の Web サイトを参照してください。

## 10 監視対象インスタンスの追加

プラグインが正常にデプロイできたら、次の手順に従って、プラグイン・ターゲットを Grid Control に追加します。これにより、ターゲットが集中的な監視および管理の対象になります。

1. プラグインをデプロイしたエージェントのホームページで、「追加」ドロップダウン・リストから **IBM DB2 Database** ターゲット・タイプを選択し、「実行」をクリックします。IBM DB2 Database の追加ページが表示されます。

2. プロパティに次の情報を入力します。

- **名前:** プラグインの名前。
- **JDBC URL:** IBM DB2 JDBC ドライバの接続 URL の名前。

例:

```
jdbc:db2://<server>:<port>/<database>
```

JDBC URL の引数はデータソースを表します。パラメータの定義は次のとおりです。

- **jdbc:db2:** DB2 UDB サーバーへの接続を表します。
- **server:** データベース・サーバーのドメイン名または IP アドレス。
- **port:** データベース・サーバーに割り当てられた TCP/IP サーバー・ポート番号 (0 ~ 65535 の整数)。
- **database:** DB2 クライアントの DB2 データベース・カタログ・エントリを参照する、データベースの別名。

**database:** DB2 UDB (LUW) のインストール時に定義されたデータベースの名前。

- **JDBC ドライバ:** DB2 Universal JDBC ドライバの名前 (オプション)。

例:

```
com.ibm.db2.jcc.DB2Driver
```

- **ユーザー名:** データベースの有効なユーザー名。

詳細は、「[適切なオペレーティング・システム・ユーザーの使用と認可レベルおよび権限の割当て](#)」を参照してください。

- **パスワード:** ユーザーのパスワード。

3. 「**接続テスト**」をクリックして、入力したパラメータが正しいことを確認します。
4. Oracle Management Service 10g リリース 3 (10.2.0.3) 以下では、接続テストが成功した場合、手順 2 の暗号化されたパラメータを再入力して、「**OK**」をクリックします。

---

**注意:** Oracle Management Service 10g リリース 3 (10.2.0.3) で、暗号化されたパラメータを入力せずに「OK」をクリックすると、ログインが失敗したというエラーが表示される場合があります。

---

図 2 IBM DB2 データベースの追加

ORACLE Enterprise Manager 10g  
Grid Control

Enterprise Manager Configuration | Management Services and Repository | Agents

### Add IBM DB2 Database

Test Connection Cancel OK

**Properties**

\* Name   
Type **IBM DB2 Database**

Name	Value
JDBC URL (Example : jdbc:db2://<host>:<port>/<database>)	<input type="text" value="jdbc:db2://stmpi1.com:50000/TOOLSDB"/>
JDBC Driver (Optional - Default : com.ibm.db2.jcc.DB2Driver)	<input type="text" value="com.ibm.db2.jcc.DB2Driver"/>
Database Username	<input type="text" value="*****"/>
Database Password	<input type="text" value="*****"/>

**Monitoring**

Oracle has automatically enabled monitoring for this target's availability and performance, so no further monitoring configuration is necessary. You can edit the metric thresholds from the target's homepage.

Test Connection Cancel OK

---

**注意：** プラグインをデプロイし、環境内で監視する 1 つ以上のターゲットを構成したら、次はプラグインの監視設定をカスタマイズできます。具体的には、使用する環境の特別な要件に合わせて、メトリックの収集間隔やしきい値の設定を変更できます。なお、1 つ以上のメトリックについて収集を無効にした場合、それらのメトリックを使用したレポートに影響が及ぶ可能性があります。

---

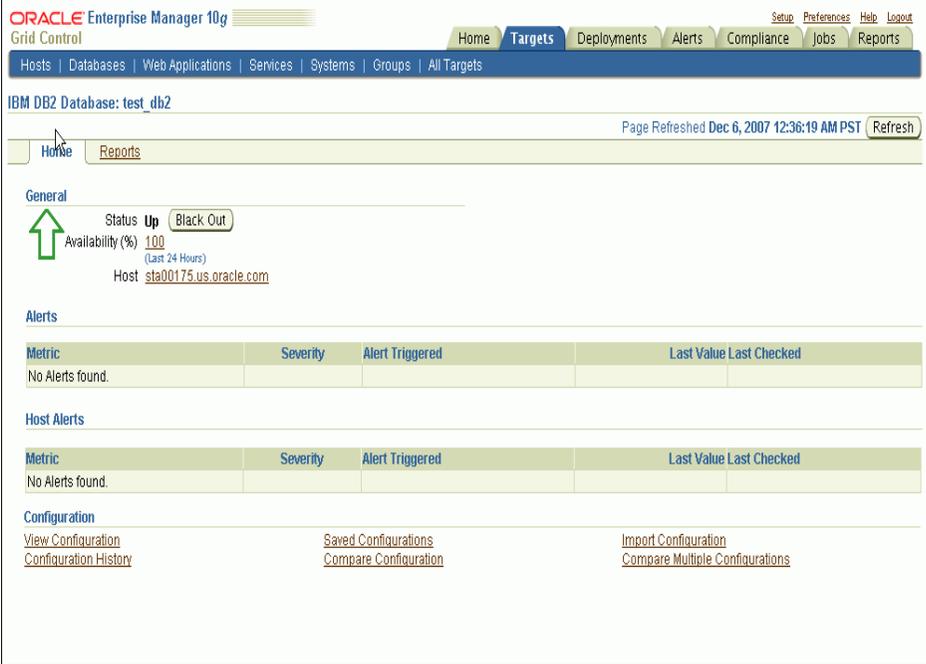
## 11 プラグインの検査および検証

プラグインがデータの収集を開始するまで数分間待機したら、次の手順を実行して、プラグイン・ターゲットが Enterprise Manager で適切に監視されているかどうかを確認および検証します。

1. エージェントのホームページの「監視ターゲット」表で、IBM DB2 Database ターゲット・リンクをクリックします。

IBM DB2 Database のホームページが表示されます。

図 3 IBM DB2 Database のホームページ



The screenshot shows the Oracle Enterprise Manager 10g interface for the IBM DB2 Database target 'test\_db2'. The page is titled 'IBM DB2 Database: test\_db2' and includes a 'Page Refreshed Dec 6, 2007 12:36:19 AM PST' timestamp and a 'Refresh' button. The main content area is divided into several sections:

- General:** Shows the status as 'Up' with a green arrow icon, 'Availability (%) 100 (Last 24 Hours)', and the host 'sta00175.us.oracle.com'. There is a 'Black Out' button.
- Alerts:** A table with columns 'Metric', 'Severity', 'Alert Triggered', and 'Last Value Last Checked'. The content is 'No Alerts found.'
- Host Alerts:** A table with columns 'Metric', 'Severity', 'Alert Triggered', and 'Last Value Last Checked'. The content is 'No Alerts found.'
- Configuration:** Includes links for 'View Configuration', 'Configuration History', 'Saved Configurations', 'Compare Configuration', 'Import Configuration', and 'Compare Multiple Configurations'.

2. 「メトリック」表に、メトリック収集エラーが報告されていないことを確認します。
3. 「レポート」プロパティ・ページを選択して、レポートが表示されていることを確認します。
4. 「構成」セクションの「構成の表示」リンクをクリックして、構成データが表示されていることを確認します。構成データがすぐに表示されない場合は、「構成の表示」ページで「リフレッシュ」をクリックします。

## 12 プラグインのアップグレード

プラグインをアップグレードするには、次の手順を実行します。

1. IBM DB2 プラグインのアーカイブを、ブラウザを起動しているデスクトップまたはコンピュータにダウンロードします。アーカイブは、Oracle Technology Network (OTN) からダウンロードできます。
2. スーパー管理者として Enterprise Manager Grid Control にログインします。
3. Grid Control ホームページの右上隅にある「設定」リンクをクリックし、次に「設定」ページの左側にある「管理プラグイン」リンクをクリックします。
4. 「インポート」をクリックします。
5. 「参照」をクリックし、アップグレード用にダウンロードしたプラグインのアーカイブを選択します。
6. 「リスト・アーカイブ」をクリックします。
7. プラグインを選択して「OK」をクリックします。
8. プラグインのデプロイ先のエージェントすべてに優先資格証明が設定されていることを確認します。
9. より高いバージョンのプラグインをデプロイするエージェントに対して、IBM DB2 ターゲットをブラックアウトします。必ず即時ブラックアウトを選択してください。
10. 「管理プラグイン」ページで、IBM DB2 プラグインの「デプロイ」列のアイコンをクリックします。管理プラグインのデプロイ・ウィザードが表示されます。
11. 「エージェントの追加」をクリックして、プラグインのデプロイ先のエージェントを1つ以上選択します。ウィザードが再び表示され、選択したエージェントが表示されます。
12. 「次へ」をクリックし、「終了」をクリックします。  
優先資格証明が設定されていないというエラー・メッセージが表示された場合、「プリファレンス」ページに移動してエージェント・ターゲット・タイプの優先資格証明を追加します。
13. ターゲットのブラックアウトを削除します（手順9を行った場合のみ必須）。

## 13 プラグインのアンデプロイ

プラグインをエージェントからアンデプロイするには、次の手順を実行します。

1. スーパー管理者として Enterprise Manager Grid Control にログインします。
2. 「ターゲット」タブを選択して、次に「すべてのターゲット」サブタブを選択します。
3. DB2 Database プラグイン・ターゲットを選択して「削除」をクリックします。この手順は、特定のバージョンのプラグインのすべてのターゲットに対して実行する必要があります。
4. プラグインのデプロイ先のエージェントに優先資格証明が設定されていることを確認します。
5. 「すべてのターゲット」ページの右上隅にある「設定」リンクをクリックし、次に「設定」ページの左側にある「管理プラグイン」リンクをクリックします。「管理プラグイン」ページが表示されます。
6. IBM DB2 Database プラグインの「アンデプロイ」列のアイコンをクリックします。「管理プラグインのアンデプロイ」ページが表示されます。
7. DB2 Database 管理プラグインに現在デプロイされているエージェントをすべて選択して「OK」をクリックします。

プラグインを Enterprise Manager から完全に削除するには、システムのすべてのエージェントからアンデプロイする必要があります。

8. 「管理プラグイン」ページで IBM DB2 Database 管理プラグインを選択して、「削除」をクリックします。

## 14 プラグインのトラブルシューティング

プラグイン使用時に発生する可能性のある様々な問題を解決するには、次の URL で入手可能な『Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in トラブルシューティング・ガイド』を参照してください。

<http://www.oracle.com/technology/documentation/oem.html>

## 15 ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト

<http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

### ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

### 外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関する評価や言及は行っておりません。

### Oracle サポート・サービスへの TTY アクセス

アメリカ国内では、Oracle サポート・サービスへ 24 時間年中無休でテキスト電話 (TTY) アクセスが提供されています。TTY サポートについては、(800)446-2398 にお電話ください。

## 16 サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

### Oracle サポート・サービス

オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.com/lang/jp/support/index.html>

### 製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/documentation/index.html>

### 研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

[http://education.oracle.com/pls/web\\_prod-plq-dad/db\\_pages.getpage?page\\_id=3](http://education.oracle.com/pls/web_prod-plq-dad/db_pages.getpage?page_id=3)

### その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.com/lang/jp/index.html>

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/index.html>

---

**注意：** ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

---

---

Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in インストール・ガイド for IBM DB2 Database, リリース 8 (3.3.1.0.0) およびリリース 9 (3.4.1.0.0)

部品番号 : B53230-02

Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in Installation Guide for IBM DB2 Database, Release 8 (3.3.1.0.0) and Release 9 (3.4.1.0.0)

原本部品番号 : E12777-03

Copyright © 2009, Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software—Restricted Rights (June 1987), Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万が一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があり得ます。

このプログラムは、第三者の Web サイトへのリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。